
ルパン三世 & 緋弾のARIA

橘花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルパン三世&緋弾のARIA

【Nコード】

N0071X

【作者名】

橘花

【あらすじ】

国立国会図書館からある書物を盗み出したルパン。そして、その奪取を命じられた武偵チーム『バスカービル』。そして、同じく奪取を狙う謎の国際秘密組織。

これは、作者が書いている二次創作小説『緋弾のARIA』の設定を継承しておりますが、物語的には一切関係ありません。なお、この小説は作者が初めて構成や物語の筋道を一切考えずに思いつきで書き始めたことを明記します。

本小説おける設定

まず、この小説はあらずじでも書いた通り、作者二次創作の緋弾のアリアの設定を継承しております。よって、この物語に宮川明などの人物から自由同盟などの組織が出てきます。しかし、明記した通りに物語的には一切関係ありません。

携帯する武器などには違いが出てくることもあります。例として、キンジがM92Fではなく、M93R（改造あり）を携帯しております。

そして、恐らくはこの物語の一番の問題となるのが作者的には理子の存在だと思えます。作者の私見ですが、峰理子リヨパン4世。すなわち、ルパンの子孫だと言う事は明らかにされている。では、峰とは何なのか？これは、作者的にはアニメなどに展開するモンキー・パンチ事、加藤一彦原作者の『ルパン三世』に登場する峰不二子の名字だと考えている。しかし、緋弾のアリアでも語られている様に、理子の両親はとくに死んでいる事となっている。なので、作者の勝手ながら、これは嘘で、実際は盗みを続けている為に娘に迷惑が掛からない様に死んだと言う事にした。っと言う勝手な設定を加える事をお詫び申し上げます。

最後になりましたが、この小説は作者が初めて設定などを殆ど考えずに思いつきで書き始めましたことを改めて申し上げます。なので、おかしい部分などは遠慮なくお伝え頂ければありがたいです。

始まり

― 国立国会図書館 ―

「なあ、次元よう。」

「なんだルパン？」

「今日狙う獲物。知ってるか？」

「いや。知らね。」

日本の首都に現れたルパンと次元は図書館の椅子に座りながら話している。

「今日の狙うお宝はこれよ。」

パソコンを操作し、一冊の本を出す。

「これは？」

「次元も知ってるだろう？ アドルフ・ヒトラー。」

「ああ。ナチス・ドイツの指導者だった男だろう。そいつがどうした？」

「いやね、そのヒトラーの書いた書物の『我が闘争』。その完

訳版がここに保存されてるんだよ。角川が出版した完訳版ってのは嘘だ。」

「どういう事だ？」

もう一度、ルパンはパソコンを操作する。

「これが、完訳版だ。」

「赤色だな。」

表紙が赤い、完全な完訳版であることが分かる。

「これが今回のお宝。」

「だが、ルパン。なんでこんなもんを盗むんだ？お前が他人の哲学に目覚めたとは思えんが。」

「ぬふふ、この完訳版の中に今回の求めるお宝の在りかが書かれてるって訳よ。噂で聞かねえか？第三帝国の膨大な遺産が今も残ってるって。」

「噂じゃな。だがなルパン。本当にあると言う噂は聞かんぞ。」

—羽田空港—

「ルパンが日本に来たのか？」

国際刑事警察機構（ＩＣＰＯ）所属の銭形幸一警部、通称とつっあんがルパンが日本に居ると言う情報を掴み、フランスから日本へ戻ってきた。

「銭形警部ですか？」

と、高校生数人が来て、その中のツインテールの少女が話しかける。

「そうだが、君達は？」

「私たちは東京武偵高校２年で、チームバスカービルの者です。」

「では、君たちが派遣されると言っていた東京武偵高校の生徒かね？」

「はい。」

メンバーはアリア、キンジ、白雪、レキ、理子、明。まだ、チーム編成から数日しか経っておらず、初の仕事でのチームワークの確認の意味を込めて今回の依頼を受けた。

「それで、今回の件。本当なんですか？ルパン三世が日本に居ると言う事を。」

「ああ。確かな筋からの情報と、私の長年ルパンを追いつけている勘が日本に居ると言う事を教えている。」

「そうか。」

明は頷き、理子の方を見た。

（ルパン三世、理子。こいつは、面白くなりそうだ。）

そう、明は心の中で思った。

― 国立国会図書館 ―

「それでは、警備手順を確認する。」

警視庁から出勤してきた警官も合わせ、かなりの数が集結した。

「武偵諸君は自由に警備してくれて構わんぞ。」

そう言われ、外に集まった。

「何あれ？ 私たちを信用していないみたいね。」

つと、腕を組んでアリア。

「まあまあアリア。」

つと、宥めるキンジ。

「キンちゃん、どうしよう？ 何処を警備しようか？」

つと、不必要にキンジに接近する白雪。無表情のレキ。俯いている理子。その理子を見ている明。

「さて、警備だが。」

そう言ってキンジは内部の見取り図を広げた。

「まず、レキと明はあのビルの屋上から狙撃銃で掩護。」

そう言っ指差した屋上に航空機などに存在を示すライトを灯すビル。

「「はい。」」

二人は返事をし、狙撃銃を持って駆けていく。

「そして、俺たちは内部を数か所に区切って警備する。アリアは内部の巡回、俺と白雪は保管されている金庫の前で警備。」

「分かったわ。」

「それと、今回だが。校長から言われている事、忘れるなよ。」

「分かってるわよ。」

今回の依頼、最悪は人を殺しても良いと言う許可まで出ている。これは、武偵高校としては異例だが、依頼主から直接言われたために許可せねばならなかった。

―中央配電室―

「それじゃあ、次元。合図したら電源を落としてくれ。」

「分かった。」

「それじゃあ、五右衛門。お前さんと盗むのは久だが、宜しく頼むぜ。」

「承知。」

そう言い、パイプの中に入って進んだ。

―保管室―

「ここに、歴史的書物が納められているのか。」

保管室の前で警備しているキンジと白雪。今回、キンジはベレッタではなく、明から提供されたM93Rを装備している。そして、白雪用には小型のワルサーPPKを所持している。

「キンちゃん、理子さんを何で警備に就かせなかったの?」

キンジは敢えて理子には警備場所を指示せず、その場から離れた。

「それは・・・」

キンジが回答に手間取ると。

『それは私が、ルパン三世の娘だからよ。』

つと、無線から理子の声。

「え？」

『知らなかった？私はリヨパン4世。ルパン三世の娘よ。』

つと、説明する。

「そうだったの？」

『だからキー君が気遣ってくれたの。でも、見損なわないで、私も依頼を受けたからには任務放棄はしないわ。でも、私たちの任務はルパン三世の予告した書物を守る事。逮捕ではないわ。』

「予告は無かっただろう。何で、書物だって分かるんだ？」

『分かるわよ。何を狙っているかも。私は彼の娘よ。何を考えているのか予想はついている。』

「じゃあ、何を狙ってるんだ？」

『我が闘争。』

聞きなれない書物名に二人は頭の上に？を作る。

『知らないの？歴史じゃあ習わないけど、アドルフヒトラーの書いた自らの世界観と政治哲学書。』

理子が補足説明を加える。

「その我が闘争を狙っているのか？」

『そう。』

「もうちょい、もうちょい。」

保管庫からロープを下して少しずつルパンは降りてくる。

「五右衛門、早く降りて来い。」

保管室の中はまだ明るい。

「それじゃあ、昼間に見つけておいた我が闘争、盗みますか。」

そう言つて昼間見つけておいた我が闘争の所まで行く。しかし、

「そこまでだ。」

キンジが銃を抜けて言う。

「え？え？」

ルパンは驚く。五右衛門は斬鉄剣を抜こうとするが、

「動かないで下さい。」

白雪が色金殺女イロカネアヤメを五右衛門の喉元に突きつける。

「お、女。」

五右衛門も驚く。

「上出来だ、白雪。」

「あゝなんだい？なんだい？こんな高校生が警備しているなんてな。何者だい？」

「俺たちは東京武偵高校の生徒だよ。チーム名はバスカービル。」

キンジはルパン等に名乗る。

「あゝそうですかい。覚えておきますよ。」

そう言っと思いつき口を噛む。それが、次元への合図の信号だった。一瞬で、明かりは消え、真っ暗になる。

「な？」

「んじゃ、我が闘争を頂いていくぜ。」

ルパンの声がし、そっちを追う。白雪とキンジはそれぞれ別の相手を追う事となった。

始まり（後書き）

角川出版社への悪口ともとれる言葉がありますが、本小説における演出の為、私個人が角川出版社への恨み等を抱いているわけではありません。

あと、現実を追い求める作者としては一度、国立国会図書館に行つて調査すべきなのですが、残念ながら行く余裕がありません。なので、実際の内部構造などが違う事があると思うのでご了承ください。あと、外の位置関係も

ルパン、脱出

― 国立国会図書館 ―

「待て！」

キンジは逃げるルパンを追いかけて、地下水道を走る。

「お前さんに捕まるほど、俺たちは伊達に泥棒やってないぜ。」

「そうかい。」

そう言つてM93Rをルパンに向かって発砲する。校長の許可があるが、敢えて足元を狙う。

「うわっと。」

ルパンは何とか避け、走り続けた。

「まさか、女が居るとは。」

五右衛門は斬鉄剣を抜き、構える。

「おとなしく捕まってください。」

白雪は色金殺女を構えて言う。

「そうもいかん。拙者は武士、降伏は許されぬ。」

「だったら、その刀を折ってから捕まえます。」

白雪はそう言っ、下から斬りにかかる燕返しを掛けるのだった。

「ふー、ルパンの奴。うまく逃げられたかな？」

次元は外に出て、車に乗ろうとしたところを。

「うお！」

車のフロントガラスを狙撃される。

「威嚇完了。」

ボルトを引き、空薬莖を排出する。明の構えるのは、彼が嫌っているボルトアクション式対物ライフル。チェイタックM200。非常に高価で、特殊な製法を使う事から量産されていないが、2kmを飛翔しても音速以上を維持するライフルである

「明さん、目標が隠れました。」

隣でドラグノフを構えるレキが感情の無い声で言っ。

「レキ、頼むから足を狙ってくれ。校長の許可があるとはいえ、あくまでも奪還。射殺じゃない。」

明が双眼鏡で次元の身を隠した車を見る。

「レキ、跳弾で狙えないか？」

「跳弾させる場所がありません。ここからの角度だと、頭を撃ち抜きます。」

狙撃手は、高い位置を占めた時点で圧倒的優位に立てる。しかし、今回は射殺許可は出ているが、武偵としては逮捕、最悪は盗まれた物の奪還が任務。

「分かった。」

明はそう言い、M200を構える。

「待て！」

縦横無尽に都内地下を流れる地下水路。キンジは迷わない様にルパンの後を必死に追う。

「くそ。」

威嚇で再び足元を狙って撃つ。すると、ルパンが、いや、ルパンの人形が爆発する。

「な！？偽物！！」
タミ

逃げられたと、キンジは悟った。

―東京湾―

「まだまだ、甘いな。」

地下水路を使って東京湾に出たルパンは、あらかじめ用意しておいたボートに乗って逃げるのであった。

「女と思つて甘く見たが、剣の腕は相当な実力だ。」

「褒めても手加減しません。」

五右衛門と白雪は幾度も剣を交えては後退し、また剣を交えるのを繰り返す。

「この斬鉄剣に切れぬ剣は初めてだ。」

「こつちの色金殺女に切れない剣も初めてです。」

「何処か、別の場所で会いたかった。御免!」

天井を切り、天井を崩す。

「え!?!」

白雪が怯んだ一瞬を突いて国立国会図書館から逃げた。

「くううう、動けん。」

すっかり釘付けにされた次元は身動きが出来ない状況だった。入射角から位置が分かっているが、愛銃のマグナムでは命中は期待できない。っと言うか、届かない。

「なんか、無いか？」

辺りを見ると、割れたガラスの比較的大きな破片。

「これだ。」

それを一瞬で拾い、ライトの光を反射させて一点に集める。

「遣られた。」

光で目標を見失ったレキと明。

「撃てません。」

レキも狙撃を諦めた。

「遣つてくれるな。顔写真から次元だと思うが。」

狙撃銃をケースに入れ、ビルの中へ戻る。

―首都高―

「まさか、俺が一時的とはいえ釘付けにするとは。」

次元は首都高で、ルパンとの合流場所を目指していた。

「で、そっちはどうだったね？五右衛門。」

車の屋根の上に座る五右衛門に話しかける。

「女の剣士が居た。拙者がこれまで経験したことが無い程手ごわかった。」

「おんな、ね。」

―国立国会図書館―

「厳重な警備を簡単に突破するとは、ルパンも相変わらずだな。」

銭形は盗まれたのに、全く反応できなかった事に悔しさを表す。

「なんで君たちも伝えてくれなかったんだ？」

「あまりに早くて、伝える余裕がありませんでした。」

アリアも、今回の追跡に参加していない。

『キンジ、後でいい?』

つと、銭形に報告した上で、瞬き信号でキンジに伝える。

「で、何だよ。」

武偵高に戻り、報告書を書き終えてアリアへ呼び出された場所へ行く。

「今回の盗まれた書物、あれを狙って国際秘密組織が動き始めたらしいわ。」

「国際、秘密組織?」

「詳しくは分からないけど、確かな筋からの情報よ。」

「一体、どんな連中だよ?」

「分からないわよ。言ったでしょ、国際、ひ・み・つ、組織だって。」

アリアが秘密を強調して言う。

「わ、分かった。」

―某所―

「總統、我が党の栄典が盗まれた事はご存知ですか？」

「ああ。」

「あれは、我々『ナチス党』の栄典。何人たりとも、あれを見てはいけません。あれは、ヒトラー總統の秘密兵器にも迫るもの。」

暗く、總統と呼ばれた者の顔はよく見えない。

「即刻、取り返す。あれは、我々ナチスの栄典。それを盗む輩がどうなるか、世界に示せ。」

「は、奴らの今後の行動をハイパーコンピュータで計算しました。奴らは、シベリア鉄道を使ってヨーロッパ入りをすると思ました。」

「そうか。では、行こうか。出港。」

北極海、氷岩を砕き、超巨大な潜水艦が潜航した。

ルパン、脱出（後書き）

とつつあん、ここで一時登場が終了します。もしかしたらこの話でとつつあんの登場が終わるかもしれませんが。そうになると、良い所無かったな、とつつあん。まあ、この話はルパンとアリアがコラボなので、とつつあんの活躍は考えてなかった。

私は、ルパンVSコナンのスタッフほどストーリー性を重視するのは苦手なので。

追跡開始

―東京武偵高校―

「今回の逃がした件は、不問とすることになった。」

朝早く、バスカービル全員が校長に呼び出された。

「しかし、依頼にあった通りに盗まれた物は取り返せねばならん。」

校長は少し間を置き

「情報科の報告で、ルパン等はロシアへ向かったそうだ。」

資料を見せる。そこに映されていたのは、ルパン一味とシベリア鉄道。

「彼らが盗んだことは分かっている。武偵の名誉に掛け、君たちは追いたまえ。」

「はい。」

―羽田空港―

「ウラジオストク行はあと6時間も掛かるわね。」

アリアが時刻版を見て言う。

「どうするんだよ？アリア。」

「待つしかないわよ。」

「だな。」

そこへ、出発ロビーに居るパイロットと話していた明が戻ってきた。

「それじゃあ、行きますか。ウラジオストクへ。」

「「はい？」」

レキを除く全員が驚く。

「あ、明。6時間待つのに簡単に行きますかって、」

「自由同盟の専用機が世界中の幾つかの空港にある。日本じゃ成田と関西にある。」

レキ以外の全員の目が点になる。

（じ、自由同盟ってどんなに凄い組織なんだよ。）

―エアバスA350-900R 特別改造機―

最新ジェット旅客機を自由同盟が独自改造して運用している特別機。

それが、ハンガー内から出てきた。

「凄い、座席もふかふか。」

理子は燥ぐ。

「これ、普通に乗ったら幾ら位だ？」

キンジは値段を聞く。

「そうだな、自由同盟の特別機だから基本的には値段を取らないが、ざっと計算で通常のファーストクラスの20倍は掛かる。」

「2、20倍!？」

「まあ、自由同盟の専用機だ。寛いでくれ。奥には個室にもある。」

この機には個室が全部で20個ある。中は高級ホテル並みの内装で、シャワーやテレビ、ベッドから娯楽用のビリヤードまで完備している。

「ビリヤードって、機内ですか？」

「この機には姿勢安定装置を装備している。機が揺れても、中は殆ど揺れない。」

―機内 会議室―

「ヴォレス大佐、例の連中の動きは掴めたか？」

『いえ。』

テレビ画面に映し出されているヴォレス大佐は資料を見ながら言う。

『北極海から消えたこと以外は何も。』

「消えた？北極海から？」

『はい。』

「分かった。欧州に移動しておいてくれ。北極海周りなら早いだろう。」

『了解しました。』

そう言ってテレビのスイッチを切り、明は資料に目を通す。

「ルパンが、もし欧州に渡ったとしたら。」

明はなぜ、ルパンが『我が闘争』を持って欧州に渡ったのかが理解できなかった。

「あれは、前々からナチスの消えた金塊の在りかを示していると言われている物だ。その関係かな？」

後ろにある世界地図。それを見ながら明は次にルパンがどう行動するかを考えた。

―ウラジオストク―

「それで、ルパン。何で、ナチスの遺産なんかを求めているんだ？」
ウラジオストクで合流した次元と五右衛門、ルパンはカフェで珈琲を飲みながら話す。

「また、不二子か？」

「不二子は今回、関係ない。ロマンを感じないか？歴史的遺産を発見できるんだぜ。」

「付き合い切れん。」

次元は呆れる。

「拙者はモスクワで降ろさせてもらっ。」

「モスクワまでは行くんだな？」

ルパンは五右衛門に確認する。

「理由は言えぬが、モスクワに用がある。」

「ま、いいって事よ。俺らは、どうせ自由な人間らの集まりだからな。」

「それよりもルパン。あの国立国会図書館で警備していた高校生は何者だ？」

ルパンは次元の質問を聞き、パソコンを操作する。

「聞いたことはある筈だぞ。武偵って単語。正式には武装探偵。東京武偵高校の生徒だろう。」

東京武偵高校のホームページにアクセスして、次元に見せる。

「武偵ね。日本も、物騒な世の中に成っちゃったな。」

「泥棒が言ったって。」

「それで、何て名だ？俺を車に釘付けにした奴は？」

「拙者の互角の剣術を使う女も。」

「そう焦るなって。」

ルパンがパソコンを操作して集合写真を見つける。

「チーム・バスカービル。あゝやだやだ。宿敵、ホームズさんの解決したバスカービルの魔犬から採ってるな。」

全員の顔写真をデジタル処理して正面から映ったようにする。

（――、おいおい。娘が居るじゃねえか。）

ルパンは集合写真の中に移る娘『峰・理子・リヨパン4世』を見つける。

（どうすつかね。）

「おいおい、こいつは明じゃねえか。」

次元が横から見る。

「誰だい？そりゃあ。」

「裏の世界じゃあ有名な奴だ。ロシアの狙撃部隊に居て、腕は一流。将官からは色々と汚い仕事もさせられているらしい。」

「おゝ、怖い怖い。」

「ルパン、冗談言つてないでこいつは本気でヤバい。真面まともに正面から遣り合ったら勝ち目はない。」

「良く生き残ったな。」

「まさか、奴を相手にしているとは思わなかったからな。運が良かった。」

次元は威嚇で狙撃されたことを感謝した。もし、本気で撃つたら。次元は今頃、天国にいただろう。いや、地獄かな？

「列車の乗る時刻まで30分だ。そろそろ行こうぜ。」

ルパン等はウラジオストク駅を目指して歩いた。

シベリア鉄道 前編

―ウラジオストク駅―

「そろそろ列車が来るな。」

ルパン等が駅で列車を待っている。

「ルパン、何で変装なんかするんだ？」

ルパンと次元、五右衛門はそれぞれ思い思いの変装をして列車を待っている状態だった。それに疑問を感じた次元はルパンに聞いた。

「分かんねーかな？あれが？」

ルパンに指差された方を見ると、武偵高制服にコートを着たアリア達が居た。

「あれは、東京の。」

「どうやって嗅ぎ付けたか知らねえが、情報収集は相当高いレベルの様だな。」

「本当にこの列車に乗るのかよ？」

キンジがアリアに聞く。

「知らないわよ。明がこれに乗ってモスクワまで行くって言ったんだから。」

「直感で、これにルパンが乗るって思ったんだよ。それに、どうせモスクワには行くんだ。早めの方がいいだろう。」

シベリア鉄道は一週間かけてウラジオストクとモスクワを繋いでいる。ロシアの東から西へ列車の移動ではそれぐらい掛かると言う事だ。

「来たぞ。ロシア号だ。」

ウラジオストクとモスクワを結ぶ鉄道網を走るロシア号が駅に入ってきた。

「それじゃあ、部屋は好きにしてくれ。一応、人数分のツインは取った。二人一部屋も良し。一人でツイン室を贅沢に使うも良し。」

明がそう言っただけで列車内に入った。モスクワにある終着駅『ヤロスラフスキー駅』まで一週間かけての長旅である。ストレスが溜まらない様に1等車のツイン室を人数分取ったのだ。

――明の部屋――

「ツインの部屋にしたんだし。キンジと、アリアは上手くやるだろうか。」

明は、二人がより親密の中になるのを願っていた。

「あの二人は武偵としては最高のタッグだ。もっと、親密になれば結束力も高まり、それがチームの士気にも繋がる。」

ただ、一人を除いて。

『アリア、キンちゃんから離れなさい!!』

と、明の予想通りに白雪の怒声。

「白雪、いや、黒雪さんは相変わらずだな。」

つと、ため息を付いたその時。

『離れないなら、これを撃ちます。』

そう言うて間が無い時に連続した銃声。

「M60をぶつ放したか。あの武装巫女、あんな恐ろしい機関銃を見せられた時には冷汗ものだったよ。」

一応、現在では何処の公共交通機関にも防弾装備を義務化されている。この列車も例外ではなかった。

「ま、士気を下げなきゃいいけどな。」

と、その時ノック。そして、

「やつほー、あつきら君。」

「何時からそんな風に呼ぶようになった?」

理子が明の部屋に入って来た。

「ぶー、理子的に良いと思うのに。じゃあ、あー君。」

「俺は〇えた〇の〇〇じゃない。」

「ぶー、じゃあどう呼べばいいの?」

「普通に呼んでくれ、リヨパン4世。」

皮肉を込めて言う。

「ふーん、まあいいけど。」

理子が裏理子になる。

「この列車に、ルパンが乗っていると云ったら、どうする?」

「知ってる。だが、この列車の中じゃあ残念ながら武偵活動が出来ないのが現状なのでね。」

「へー、分かってるじゃない。」

シベリア鉄道はロシアの公共交通機関。そこでの武偵活動は武偵法でも禁止されている。

2日間、何事も無く列車は着々とモスクワを目指して運行していた。時々、白雪とアリアの銃撃戦が部屋で起こり、それから逃れるため

にキンジが明の部屋に数度来た以外は。

「やっぱ、ロシアと言えばセリヤンカ、ビーストロガノフでしょ。」

明はロシア料理を満喫している。久しぶりの祖国だから、母国料理を楽しんでいるのだ。

「クワスも最高だな。」

「酒を飲むな!!」

キンジが明を注意する。クワスとはアルコール度数1〜2・5（日本酒は15前後）の微アルコール飲料だ。

「大丈夫。度数は低い。飲んでも、酔っぱらわないよ。」

そう言っただけ。

「流石に、ウォッカはやめるけどね。」

ウォッカは非常に強い酒として知られ、一時期はアルコール度数98という恐ろしい度数で売られていた。現在でも、アルコール度数96でなら販売されている（日本人が飲んだら、通常は喉が文字通り焼ける）。

「まあ、それならいいけど。」

「ルパン、連中が仕掛けて来んが、どうするんだ？」

「武偵法じゃあ公共交通機関での銃撃戦が禁止されている。こっちが仕掛けない限り、向こうも仕掛けれんよ。」

「なるほど。」

「それで、五右衛門ちゃんは？」

「上で、風に当たってるだよ。」

「ここに来てても修業とは、精が出るねー。」

ルパンは感心したように言う。

「それよりルパン。いい加減、『我が闘争』を盗んだ本当の意味を教えろ。」

「言つたろ。歴史に隠された謎を解き明かしたいって。それ以上の意味は無いよ。」

「お前が、そんな理由で危険を冒して盗むとは思えん。」

「分かったよ。実は、」

その時、突然列車が攻撃を受けた。

「な！！何だ！？」

銃弾が列車の中を飛び跳ねる。

「来た、か。」

明は窓の外を見る。すると、外を飛び回る数機のジェット機。機首には4門のバルカン砲。形状は両翼下部にジェットエンジンが1基ずつ。

「間違いないな。性能は段違いだが、あの形状。大戦中、連合軍爆撃機パイロットに恐れられた世界初のジェット戦闘機。メッサーシュミットME262。」

「ME262?」

「ドイツが使用した戦闘機だ。連中、改造してまだ運用してたんだな。」

「連中だと?」

キンジが聞いてくる。

「北極に隠れていたナチス残党だよ。恐らくは、ルパンの奪った『我が闘争』を狙っている。」

再び、列車に向かってバルカン砲が放たれる。

「き、キンちゃん。」

乗客を辛うじて非難させていた白雪がキンジの許に行く。

「白雪、大丈夫か？」

「う、うん。平気だよ、キンちゃん。」

「それじゃあ、明、レキ。上で反撃出来るか？」

「はい。」

「任せろ。」

二人は狙撃銃を持って答える。

「それじゃあ、白雪は二人の掩護。攻撃を全て弾いてくれ。」

「わ、分かりました。キンちゃん。」

「理子とアリア、それに俺はルパン等を見つける。上手く、やってくれよ。これは、俺達がチームを組んで初めて完全に分担して仕事を熟す任務だ。失敗は、許されないぞ。」

「分かってるわよ。」

「勿論だよ、キー君。」

アリアと理子が答える。

「それじゃあ、行動開始だ。」

それぞれの役目を果たすために、食堂車から出て行った。

シベリア鉄道 中編

―ロシア号―

「不味いよ。」

窓を開け、そこから武器を突きだして応戦する明とレキ。しかし、高速で動くジェット機相手に対物ライフルや狙撃銃では効果が薄い。

「ようやく、一機仕留めた。」

運よくエンジンに当り、火を噴いて墜落していくMe262改が見える。

「こちらも、一機仕留めました。」

「そうか。白雪、もう少し耐えられるか？」

「はい。明さん、レキさん。」

その時、無線機からウォレス大佐の声が聞こえる。

「何だ、大佐？こっちは立て込んでいる。」

『それは分かっております。しかし、更に不味い状況です。山岳地帯を低空で、その列車に近づく飛行物体が数機あり。内、極めて巨大な飛行物体が2機居ります。』

「解析できたのか？」

『恐らくはMe323でしょう。』

「巨人^{ギガント}か。連中、まだそんなまで持っているのか。」

『それに、周りはMI18で固めております。』

「ははは。開発中止の機を大量にか。こりゃあ、旧ソビエト政府との関係があつたのかもな。」

国際秘密組織。ナチス残党軍が、旧ソビエト政府との関係を持っていたと明は疑った。

「まあ、今となつてはソ連は崩壊しているからどうでもいいが。この攻撃は何とかないとな。」

既に、明等の居る客車は穴だらけだった。そして、列車が加速し始める。

「どうした？」

「あ、明。後部列車が。」

見ると、後部列車を繋ぐ連結部分が狙撃され、切り離された。見ると、MI18から、身を出して狙っている狙撃手が一人、居た。

「ば、馬鹿な。ここから、あそこまで、5?以上はあるぞ。それを、モシン・ナガンで。」

明は、MI18から身を乗り出して連結部分を正確に狙撃した狙撃

手の顔を見る。

「冗談だろう。何故、ここに妖精^{シモ・ヘイヘ}が？」

フィンランド最高の狙撃手、シモ・ヘイヘがモシン・ナガンを構えて居る。ヘリとギガントが上昇し、上空を通過体制に入った。

「何処に居るんだ？」

キンジとアリア、理子はルパン等を探している。そこへ、明から無線が入る

『キンジ、不味いよ。敵さん、降下猟兵を投入してきた。』

「降下猟兵って、空挺部隊って考えていいか？」

『ああ。だが、ドイツの空挺部隊は舐めてはいかん。要塞の占領など、局所に投入されては戦果を残している。』

「わ、分かった。」

キンジは無線機を切り、武器のM93Rを取り出す。

「ねえ、キンジ。一体どうしたの？」

アリアが聞いてくる。

「ドイツの空挺部隊が来た。接近戦になる。」

「全く、それ所じゃないってのに。」

裏理子で、理子は言った。

「キンジ等に合流する。」

チエイタックM200を置き、接近戦用のデザートイーグルを2丁持ち、ナイフも用意しておく。レキも、ドラグノフに銃剣を取り付ける。

ドラグノフは、元々は狙撃銃と言うよりも支援火器と言う事で開発されている。当時のソ連軍の主兵装であるAK47は命中精度があまり良くはなく、それを補うためにドラグノフは開発されている。その為、銃剣を装備することが出来る。

「はい。」

白雪は返事をする。レキは無言で頷く。

「次元、五右衛門。」

ルパンは客車の真下にしがみつく感じで居り、聴音機で客車内の明の会話を聞いていた。

「ナチスの空挺部隊が来るそうだ。」

「もう来ている。」

五右衛門がそう言った

「そうつですね、五右衛門ちゃん。次元ちゃん、どうするね？」

「ふん、暴れたきゃあ暴れればいいだろう。」

「簡単に言うねえ。泥棒はもっと、こう、クールにいかないと。」

「じゃあ、どうするんだ？」

「まあ、戦うよ。それに、久しぶりに娘の顔が見たくてね。」

「ケツ、子思いの親の鏡だよ。」

次元が茶化すように言う。

「泥棒が、子思いの親の鏡とはねえ。」

そう言って床を外し、中に戻った。

シベリア鉄道 後編

―ロシア号―

「それで、ルパン。どうするつもりだ？」

「決まってるでしょ、亡霊ドイツ軍を追っ払うんだよ。」

ルパンと次元は銃を出し、五右衛門は斬鉄剣を構える。

「次元、列車を走らせれるか？」

「ああ。だが、どうして？」

「車掌が。」

ルパンが指差した先には、車掌が既に撃たれて、死んでいる。

「どこに居るのよ？もう！」

アリアと理子、キンジはバリケードを作って応戦している。

「くそ、前に進めないな。」

「何とかしなさいよ、バカキンジ。」

「何とかたって。」

「このままじゃあ、キンジだけじゃなく、私まで風穴開くじゃない」

「俺は良いのかよ!？」

3人は交代交代で反撃しているが、相手は突撃銃などのマシンガンで武装しているのが殆ど。火力負けしている。

「キンちゃん、アリア、理子。退いて。」

レキと明、それに白雪が合流した。そして、白雪の手には

「え、M60!？」

を腰だめで構えている。そして、それを連射した。

「うわ!？」

急いで3人は頭を下げた。銃弾は、3人の頭上を通過して行く。

「ユキちゃん、怖い。」

理子は普段の表理子の声で言う。

「白雪さ、いや、黒雪さん。もう良いよ。」

見ると、ドイツ降下猟兵数人が負傷し、後は退却している。

「んじゃ、後は煩い空だな。」

まだ、上空にはヘリやギガント、ME262が旋回しながら列車を包囲している。

「今回は、スコープを見る必要が無いか。」

明はチェイタックを空へ構える。

「狙撃手は、ただ待つこと。待つて、待つて、待ち続け。獲物がスコープの十字架に掛けられたその時、私は全てを解放する。」

明は上空に向かって引き金を引いた。すると、青白い曳光を引き、銃弾が空へ上る。すると、途中から不規則に動き始める。

「な、何だ！？」

レキを覗く全員が驚く。そして、ME262一機がその不規則に動く銃弾に撃ち抜かれ、撃墜した。

「これが、魔弾。今まで隠していたが、僕の本当の二つ名は『魔弾の射手』。」

元々、魔弾の射手はドイツの伝説を元にカール・マリア・フォン・ウェーバーのオペラ『魔弾の射手』で世界的有名になった。

「これが、僕の最高キルレンジ。2700mの真実。」

次々に銃弾は戦闘機を撃ち落とし、次にギガントに襲い掛かった。

（凄い。まるで、銃弾が踊っているみたいだ。）

キンジは上空を自由自在に飛び回り、航空機を撃ち抜いている様を見て思う。

「さーで、最後のヘリだ。」

銃弾が青白い曳光を引き、残ったヘリ目掛けて向かっていく。

「これで、魔弾の射手の公演を、終幕する。」

明がそう言った時、魔弾は、消えた。

「な!？」

しかし、明とレキの目には確かに映った。銃弾を、撃ち落とした存在を。

「馬鹿な、魔弾を、撃ち落とした。」

ヘリから身を出しているスナイパー。シモ・ヘイヘが。

「いいだろう。相手してやる。」

明はチェイタックを構え、ヘリに狙いを定める。

「先に行け。ルパン等を捕まえろ。」

明は構えながら、キンジ達にそう言った。

「わ、分かった。」

キンジ達はそう言い、先に牽引車へ向かった。

「私も手伝います。距離は、私もギリギリ入っているのです。」

レキも、ドラグノフを構えて言う。

「ありがとう。」

ボルトを引き、薬莖を排出しながら言った。

「こいつ等、何でドイツ軍が残ってたんだ？」

「次元は聞いた事ないか？北極にドイツの秘密基地があつて、ナチスの再建を目指しているって。」

「噂じゃないのか？」

「事実なんだよ。」

目の前に居るのが紛れもなくナチス親衛隊員。そして、降下猟兵。次元も信じるしかなかった。

「いい加減、成仏しろ。」

五右衛門は斬鉄剣を使って頭を叩いたり、蹴って外へ落とすなどしている。

「そこまでよ！！。」

ようやく、ナチスを一掃したと思った時、アリア等が来る。

「大人しく、本を返しなさい。」

ガバメントを構えて言う。

「アリア。」

「へえー、お前さんらがバスカービルか。」

手を挙げながら、ルパンは言う。

「それに、ホームズ家と一緒にとは驚いたぜ、理子。」

ルパンは娘である理子を見て言う。

「でも、どうしてお父様がここに居るの？」

理子も、ワルサーP99を構えて言う。

「死んだと思っていたのに。」

「そりゃあ、娘である君に問題が起きない様にしたんだよ。でも、君は俺と同じ道を最終的には行くのか。」

「私は、初代を超える為に居るの。」

「へえー、そうか。でも、まだまだ、俺を越えていないな。」

それと同時に、ルパンの足元にスタングレネードが落ちる。

「それじゃあな。理子。元気な顔見れて、嬉しいぜ。」

爆発後に、凄まじい閃光と音がキンジ等の聴力を一時的に無力化する。

「逃げられたか。」

治まると、ルパン等は居なかった。

「キンちゃん、これからどうする?」

「取り敢えず、このままモスクワまで行く。我が闘争とヒトラーの財宝と言えば、ドイツが怪しいからな。」

「そろそろ、あのへりも燃料を切らす所だろう。」

今まで、何発も発射したが、寸前の所で迎撃される。しかし、燃料が切れれば追って来れない。

「決着はお預けか。」

明がそういった時、へりは旋回して戻って行った。

「中が静かになったって事は、取りあえず亡霊共は全員倒したか、脱出したのだろう。」
ナチス

「でも、これは序の口です。」

「分かっているよレキ。連中は、今回は様子見程度だろう。威力偵察って奴だ。」

列車は、銃撃で穴だらけだが、走り続けている。乗客は白雪が後ろに集めた時に銃弾で客車ごと切り離された。負傷者はいない。

「このまま、モスクワまで行く事になるキンジ等と合流しよう。」

「はい。」

走って牽引車の方へ向かって走った。

――ナチス本部――

「降下猟兵中隊規模の兵を投入しておきながら、聖典は取り返せず、しかも壊滅とは。」

「も、申し訳ございません。」

「航空機も遣られ、戻ったのはヘイへの乗るヘリだけです。」

「ボルマン総統。」

「総統。」

ナチス親衛隊員は整列して総統を見る。総統と呼ばれた男は、マルティン・ボルマンその人であった。

「まあ、良い。バルト海へ進出し、攻撃を掛けよう。それに、邪魔するのはルパン等だけではないようだしな。」

「はい。」

「だが、早くしなくては。我らの復讐の日は近い。この世界に、我々を見捨てたこの世界への復讐の日は近い。」

そう言つて、奥の部屋へ入った。

ここには、壁に巨大な鉤十字ハーケンクロイツが掲げられている。先ほどのホールみたいな部屋にも掲げられているが、ここのは、壁全体を使って書かれている。

「総統、貴方様の目覚めの日も近い。」

ナチス式の敬礼を棺に向かって行う。その棺に入っているのは、アドルフ・ヒトラー。紛れもなく、その人であった。

「赤軍の迫る中、秘密Uボートで脱出した時、我々は世界に復讐を誓った。北極に築いた秘密基地で最後の復讐をしようと誓った。クローンまで用意し、ベルリンに残して脱出したその時は世界に対し憎悪しか持てなかった。」

棺を掴み。

「だが、ようやく希望を持てる。さあ、始めましょう。復讐を。そろそろ、回収し、行きましょう。復讐の地へ。」

潜水艦は、ゆっくりと海中をバルト海目指して航行して行った。

シベリア鉄道 後編（後書き）

明の魔弾の射手、本当は最初に本編で語ろうと思っていたが、先にこっちで語った。

後、ナチスの秘密基地は南極にあると言われていたが、話の都合上この話では北極に変えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0071x/>

ルパン三世&緋弾のアリア

2011年12月3日14時46分発行